



魂の中小企業〉名刺のパワー、あなどるどるなかれ

2011年9月20日 10時15分



鎌田恭幸さん(左)と新井和宏さん



阿部晋也さん。「このバナナの繊維から、こんな名刺をつくります」

■ 中島隆 (中小企業専門記者)

戦争、テロ、暴動、世界的な企業の破綻(はたん)。最近では、ギリシャの財政危機、アメリカ国債の行くえ。

すべてが、株価や外国為替市場をゆるがす。地球がまわっているかぎり、金融の世界は眠らない。

新井和宏(43)は3年前まで、日系の信託銀行や外資系の資産運用会社ではたらいてきた。株や為替の動きをにらむ日々。ちょっとした失敗、たとえば睡眠不足や疲れから判断が鈍ったり、システムを動かす際にミスをしたりすれば、何百億円もの利益が飛んでしまう。

だから、新井は決めていた。(どんなに忙しくても、1日8時間は寝るぞ)

だが、現実には許してくれなかった。東京市場がおわっても、シンガポール、ロンドン、ニューヨークと、マーケットは開き続ける。プレッシャーに眠れない日々がつ

づく。

マネーの世界に身を投じて15年たった2007年夏ごろ、ストレス性の病になった。手や足にかゆみが出る。我慢できずに、かきむしる。血がでる、うむ。かゆくて眠れず、またかきむしる。足が血だらけになるので、靴下がはけなくなる……。発症から1年あまりたった2008年9月、外資系の会社をやめた。

新井が会社を辞する少しまえ、同じ外資系金融グループ傘下の信託銀行で副社長をしていた鎌田恭幸(46)も、やめていた。年金などの資産運用

を長くしてきたが、短期的な利益をもとめて世界中をうごめくマネーに嫌気がさしたのである。

新井と鎌田らは2008年11月、神奈川県鎌倉市に、投資信託の運用会社「鎌倉投信」をつくった。源頼朝ゆかりの鶴岡八幡宮から歩いて数分、築80年ほどの木造民家が事務所である。

ふたりとも、東京のオフィスビルではたらいてきた。でも、この古民家、けっこう居心地がいい。社長になった鎌田は、島根の農家の生まれ。新井は横浜の豊屋の息子。エアコンの風より、自然の風を感じるほうが、しっくりするのだ。

起業したころ、世界中にリーマン・ショックの嵐が吹いていた。こんなときに起業するなんて無謀だ、などと陰口をいわれた。でも、2人には自信があった。〈ふつうの会社をつくるのなら、金融の荒波にのまれ、沈むかもしれない。でもおれたちは、「いい会社」を増やすことで投資家の資産を増やす。そんな会社をつくるんだ〉

「いい会社」とは、これからの日本に必要とされる会社だという。規模の大小とか、上場しているかどうかなど、関係ない。社員とその家族、取引先、顧客、消費者、地域社会、地球環境、そして株主などを大切にする会社なのだそうだ。

「短期的な利益をねらうのではなく、『いい会社』をいっしょに増やしましょう」。そんな説明に共感してもらった投資家に、「いい会社」の上場株を中心に組み入れた投資信託を買ってもらっている。

鎌田は、かねてから社会貢献事業にかかわりたいと思っていた。念願がかなった。

新井も充実感いっぱい。障害者雇用に力をいれている会社を訪ねると、子どもを思いたす。足に障害があった母が買い物に行くとき、かならず新井が付いていき、荷物をもつ。すると、近所のスーパーや商店街で、「お母さんのお手伝いかい、偉いねえ」とほめられる。そんな、懐かしい記憶がよみがえるのだ。

ふたりは天職を見つけたのかもしれない。



さて、鎌倉投信のスタッフ9人の名刺には、こだわりがある。バナナの茎の繊維をつかった紙製で、点字が付いているのだ。鎌田たちは、この名刺をつくっている会社を、「いい会社」と認めたのである。

その会社は、札幌ドームのほど近くにある「丸吉日新堂印刷」。6人でやっている小さな会社だ。

名刺の売り上げ1%を、環境団体や盲導犬協会に寄付。点字は、障害を

もつ人たちに打ってもらって自立を助ける。バナナ名刺は、途上国の人々の仕事につなげるねらいがある。

その志に、「日本でいちばんの名刺屋さん」と呼ぶ人がいる。共感がひろがり、全国で2万5千をこえる人が使っている。

すべては、25歳で社長をついだ2代目、阿部晋也(40)の思いからくる。困っている人がいると、手をさしのべたくなるのだ、おせっかいかもしいけれど。

「でも、ぼくは自慢できる人間ではありません。これからお話することを聞けば、わかります。まずは、小学5年のころです。長く入院していた母が退院してきました……」

病のため、母は片方の目が思うようにならなかった。そんな母を、阿部少年は、からかってしまった。「母に甘えたかったんでしょね。でも、言ってはいけないことを、言ってしまったのです」

すると、母は厳しい表情にかわった。

「晋也、そこにすわりなさい」

「障害をもった人は、好きでなったわけではないの。変えたくても変えられないのよ」

阿部は、後悔した。つえをつく人、車いす生活をする人、世の中には、いろいろな障害をもちながらも、明るく生きている人がいるんだと、子ども心に悟った。

でも、いつのまにか、そのことは忘れてしまった。いや、頭のすみにはあったのかもしれないが。

阿部はサーフィンをはじめていた。女の子にもてるらしい、と聞いて。中学のときは、ツッパリから秀才まで、多くの友だちができた。校則がきびしかった高校は大嫌いだったので、中学時代の友だちとディスコにいき、踊り明かした。もちろん週末は、サーフィンボード小わきに抱え、海から海へ。

大学時代は、除雪のアルバイトなどで稼いだ。そして、ハワイ、インドネシアなどについては、波に乗った。

卒業して、ある接着剤メーカーに就職する。東京の営業所に配属されるが、ほどなく、あまりにも横暴だった役員に辞表をつきつけた。そして、長野の友人と会社を起こそうと、400ccのバイクで、東京から高速道路にのる。

〈いちおう親に報告しておこう〉。ドライブインの公衆電話で札幌に電話すると、父親がでた。

「おやじ、おれ会社やめたんだ。これから長野にいて、友だちと会社を

する」

「晋也、ちょっと待て。いちど、札幌に帰ってこい」

それもそうだなあ。長野の友に、「親に話してくるから」と連絡し、東北地方を観光しながら、一週間かけて札幌へ。脱サラして印刷会社をひとりでいとなんでいた父に、手伝わないか、と誘われる。

長野の友に連絡する。「一カ月だけ手伝って、おやじを納得させるから」

すぐに名刺をもたされ、営業にいかされた。父からの指示は、「足でかせげ」。

阿部は、ローラー作戦にでた。まず札幌駅までいき、周辺のビルにあるオフィスを、地下から最上階まで、しらみつぶしに訪ねるのだ。1日で訪問するオフィスは100社ほどだが、2社ほど注文してくれた。

100社で2社だろ、1千社で20社だなあ、3カ月だと……。そんな皮算用をしているうちに、印刷の営業が楽しくなってきた。友に、不義理の電話をし、わびた。

「どうです、お分かりでしょう。社会貢献とか何にも考えていない男だったのです」

人はみな、生き方を変える経験を、一度や二度はする。印刷会社の営業にいそしむ阿部にも、ほどなく訪れる。



「あれは、雪の夜でした」

得意先のお通夜だった。阿部は遺影にお別れをいい、会場の階段の中ほどで、一服していた。まだ喫煙におおらかな時代である。

すると、横から女性の声がした。「あんた、手伝いなさいよ」

横をみると、80歳ぐらいだろうか、1人の男性が、ゆっくりゆっくり、階段をおりている。さらに、その奥の方で、30～40代の女性たちが井戸端会議をしている。彼女たちの誰かが、阿部に注意したのだろう

でも、阿部の頭をよぎったのは、おじいさんに手を貸さなくては、ということではない。おばさんたち、あんたらが手伝えよ、というひねくれた思いだった。

とはいえ、阿部は、その階段をおりるのを手伝った。すると、お年寄りがいう。

「ありがとう」

年輪が刻まれた顔がくしゃくしゃの笑みだった。

阿部は、おのれを恥じた。

〈おれの視野に、このおじいちゃんは入っていたはずだ〉

〈でも人に指摘されるまで、何も行動を起こさなかった〉

そして少年時代、母に説教された日のことを思い出し、決心した。

〈おれは、見て見ぬふりをやめる。困っている人を見たら、かならず行動する〉

たとえば、自転車で歩道がうまって車いすが通れないとき、阿部は自転車を片づけた。電車やバスでお年寄りに席をゆずるなどは、もちろんのことだ。

障害をもった人たちに点字名刺をつくってもらっているのも、その決意からだ。施設から、うちにできる仕事はありませんか、とダイレクトメールが届いたのだ。札幌市内の印刷会社あてに、かたっぱしから送ったらしい。見て見ぬふりをしない阿部は施設をおとずれ、仕事をお願いしたのだ。

「何億円も寄付することは出来ません。でも、うちには2万5千人のお客がいます。みなさんに名刺をつくってもらうと、大きな力がうまれるのです」



この8月20日、東京の吉祥寺で、阿部の会社で名刺をつくっている人たちの集まりがあった。参加者は50人ほど。中小企業の経営者、みんな知っているIT企業の社員、歯医者さん。声のコンサルタントもいるし、中国やスウェーデン出身の人も。

初対面のとき、だれもが交換する名刺。その一枚から人の輪ができる。たかが名刺、とあなどるなかれ！

「いい会社」は日本中にある。リーマン・ショック、東日本大震災、超円高に株安。経営は楽ではないだろう。でも、みなさんは、かけがえがない。きっと応援している人がいる。(敬称略)



中島隆(なかじま・たかし) 朝日新聞中小企業専門記者。福岡県生まれ。東大経済学部卒。鹿児島支局をふりだしに、西部、東京、大阪各本社の経済部記者。名古屋報道センター次長、東京生活部次長、「ニッポン人脈記」チームをへて、2011年4月から現職。著書に「魂の中小企業」(朝日新聞出版)。

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright 2011 The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.